



昭和48年8月16日 編集・発行 岡崎市教育委員会

ゆとりある教育

県教育長 仲谷 義明

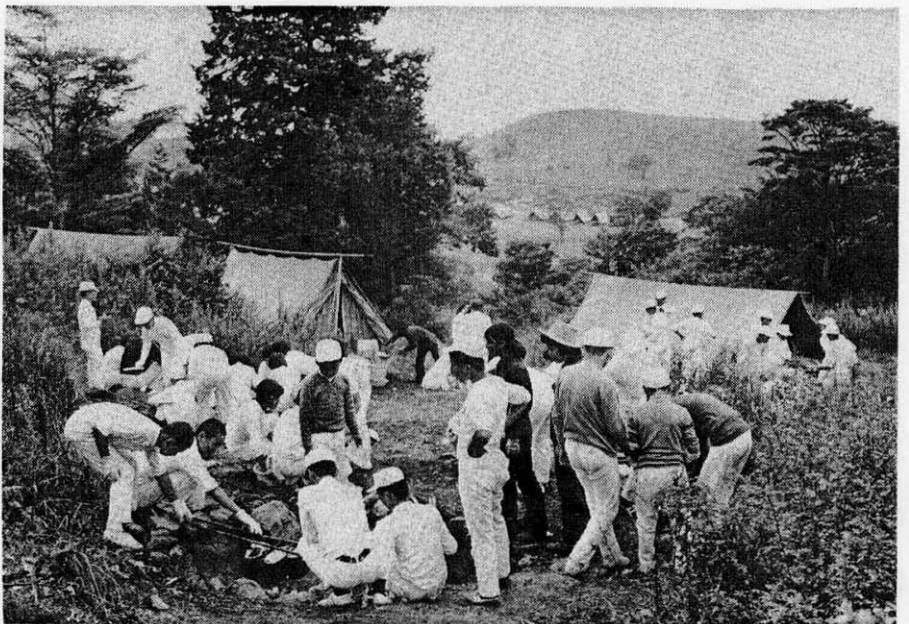
・日本の経済成長が世界の資源に影響を及ぼすようになったので、資源を使わなくて頭を使う産業の方へと、どんどん変化して行く。したがって、教育の面もそれに適応する教育の場が広がってくる。

・自己実現とは、自由ということ、人間として生まれてきて人間としてやりたいと思うことをやれるということである。

・やりたいと思うことが、これからの教育面では多様化するので、選択する能力をつけることが重要である。既存の知識だけをつみ重ねただけではだめである。

・これからの教育は未来からの呼びかけということ、一九九〇年の世界を描くと、いまの教育でいいかどうかということが問題になる。いま子どもである人たちが一番活躍するのは、まさに二〇〇〇年ころである。このことを頭において教育のシステムを考えねばいけない。

・人間本来に自分で勉強がしなくなるというの、世の中に出てからである。世の中のなにかにぶつかって、これはやらなきゃあというとき、本当に身についた勉強になる。いまのように、高校・大学



(茶臼山キャンプ 募中)

へと形ばかりの知識を頭に入れるのは本当ではない。

・ゆとりある教育のためには、ただ、ばく然とゆつくりすればいいというのではなく、どうすればよ

いかを、みんなで考えること。これがわれわれに、いま、課せられている命題である。

七月十七日 岡崎医師会館講演
速記録より (文責 編集部)

教育随想

御飯を頂く

松野尾潮音



しを食べたのである。「頂きます。」と箸をとれば、一粒の御飯も粗末にはできない。人間の営みの結晶であるから、物を粗末にすることは、その物を生産した人間を粗末にすることである。

人間尊重のスローガンと、使い捨ての時代との考え方は両立しない。多少口に合わなくても、生産者や主婦の心を思つてしんばうする。おしいければ率直にほめて喜びをともにする。こうした家庭の主婦は料理に熱心になる。新聞を読みながら、一言も言わずムズムズといった食べ方を三十年も続けられれば、料理を知らぬ主婦が育つ。

食物と同時に人間関係を、心づくしを食へ合えば、身も育てば心も育つ。食後は合掌して「御馳走さま。」とその奔走と心づかいに感謝して箸をおく。

こうなれば食卓が人間形成の場となる。外国で食事を非常に大切にすることも、やはりこの点に着目してのことであろう。家族の心が通い合うようになると、家族的功利主義が芽ばえる。

ところで、このようなグループのエゴイズムを越えさせるところに宗教の役割がある。仏前もまた人間形成の重要な場であるのである。

市民意識を培うために、人間を回復するために、主婦の手料理をゆつくりいただく習慣をとりもどしたいものである。

(岡崎市教育委員)

いまはむかし
秋の八月十五日

秋蟬も泣き糞虫も泣くのみぞ 虚子

「詔勅を拝し奉り」の句で、二十八年前のことを呼びさます力がある。六人の方々に、あの日のことを振り返っていた。

当時五十八歳 校長会会長

八月十五日、ああ終戦の日のことか。

市内の校長たちは、梅園の宿直室へ集合して重大放送を待つとつた。苦戦を乗り切るため、きつと陛下が新しいことを発表するだろう。放送を聞いて失望落胆し、みんな泣いたよ。

当時二十九歳 勤労学徒引率訓練

戦況の好転を期待して放送を待っていた。私自身は、その放送が終戦を告げる内容だとはわからなかつた。一般工員の間から戦争は負けたという声と、今までつくってきた落土増槽を打ち壊す音が聞こえて来た。自分の足もとが崩れた気持ち、これから一体おれたちはどうなるかで、子どもたちに元気にやれよという気力さえなかつた。その夜の電燈のまぶしさが、まだまぶたの中にある。

当時二十九歳 勤労学徒引率訓練

天皇の戦争終結の詔書を聞いて、はつ

高等学校のクラス会で、自由奔放にビールを傾け、談論風発していた友人たちが、さて御飯となると、いずれも神妙に膝を揃えて正座して箸をとつた。そのこ

つけないほど律義な姿が、今も臉に残っている。親の膝下での躰が生きていたのであろう。地方で地道に社会の底辺を培っていた人々の子弟が、希望どおりの学校へ進学できる時代であつた。田舎から出てきた者がクラスの半ば近くはあつた。

戦後は、いわゆる名門校には、条件に恵まれた都市生活者の子弟でない、進学がむずかしい時代が続き、カミソリのようにシヤープな人は育つても、鈍のよくな重厚な切れ味をもつた人たちは、世に出ることがむずかしくなつた。社会の底辺から浮き上がり、第一次産業の味を知らぬ指導者によって操作される文化は、軽薄になる。もつと土のにおいを知つた

指導者の出やすいようにしたいものである。

そのせいであろうか。「さあ、飯だ。」と食卓を囲み、掌も合わせずにガツガツと喰い、箸を捨てたら仕事仕事。こんな食事の仕方が急に広まっている。政治家までが朝めし会を開き、「一度飯でも食いましょう。」と肩をたたき合っている。「飯を喰え」ば身体は育つ。高度経済成長も得られるであろう。しかし心は育た

ない。人間は育たない。人間の危機はここに始まる。近代化によって得たものは多いが、失つたものもまた多い。重大な忘れ物の一つがここにある。

先人は掌を合わせ、「頂きます。」と箸をとつた。自然の恵み、先祖の加護、目には見えぬ多くの人々の労働、身近な人々の労作と心づくし等々を頂いたのである。食物とともに人間の営み、心づく

隠岐・島後の地質に学ぶ

現職教育理科部

隠岐・島後は、火山地質の殿堂であり、奇景と史跡に富んだ島である。

私が島後を初めて訪れたのは、二十年前の昭和二十八年の夏、大学の地学実習のためであった。酒井栄吾先生・同級生十三名と約一週間旅し、学問的に得ることも多かったが、風景のすばらしさと人情の素朴さに強く心をうたれた。実習の

最後の日、トラックにほろをかけ、粗末な木の長いすを並べた島後一台きりのバスに乗ったのも、なつかしい思い出の一つである。

卒業してから十一年たった昭和四十一年、今一度島後の地質に触れたいと思い酒井先生にお願いし、同好者八名と再び島後を訪れた。百メートル余の断崖の一

大地質断面の雄大さと明瞭さ、ハンマーで割った岩石の膚のあかぬけした美しさは実にすばらしかった。また、酒井先生の自然の事実を大切にされる態度と学問に対する情熱は、私たちの若い心を強くうった。

この夏、現職教育理科部が県外研修会「隠岐・島後の地質見学」を企画したところ、十七名の先生が参加を希望された。島後を汗を流しながら歩き、三たび火山地質の事実に触れ、奇景と史跡に遊んできた。

(六名小 磯谷栄一)

南ヨーロッパ旅行

八月二日から約二週間、私は周囲の多くの方々の協力で南ヨーロッパに行く機会を得ました。この旅を計画したのは、平凡なようですが、「百聞は一見にしかず」のことわざどおり、どうしても自分の目でヨーロッパを見たいという気持ちからでした。友人が航空関係で活躍していたり、ロンドンに在住することから私にとってヨーロッパは、そんなに遠い所ではなかったとも言えます。

現代では情報が驚くほど発達していて、各国の様子も手にとるように身近になってきています。しかしそれはあくまで表面的なことであって、膚の色や目

の色がちがうように各国にはそれぞれの風土・慣習・そして気の遠くなるような古い歴史と伝統があると思います。それらを、このハードスケジュールのかけ足旅行で理解することはとても不可能です。それでも良きにつけ、悪しきにつけこの胸に何かを感じることができればと思っています。研修旅行からいえば落第かもしれませんが、毎日の忙しさの中に何事に対しても無感動になつてしまつてい

(甲山中 平岩啓子)

とした。工場の給食は、豆の雑炊から豆粕の雑炊。げたも草履もない児童への履物つくり。これ以上やつたらかなわんというのが実感だった。

当時十八歳 師範本科二年女子生徒

先生の「終戦だよ」という言葉をだれも信用しなかったし、敗戦を知つてからも、負けてくやしいという気持ちはありませんでした。展示会に行かれたM先生が、松平村に墜落したB29の搭載品や計器類は日本の物よりすばらしいと話され逮捕されたことのほうが悲しいでき事だったので。

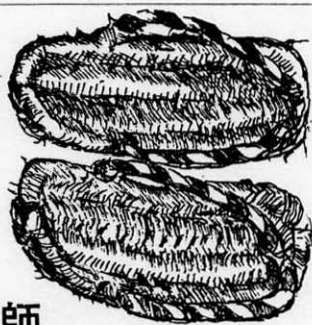
当時十七歳 師範予科三年男子学徒

敗戦によつて若い者はアメリカへ強制労働に駆り立てられると、監督将校から聞かされた。寄宿舎の中は、抗戦派と帰郷派の二つに分かれた。私たち四十名ほどの者は、食糧と手製短刀等の武器らしいものを持ち寄つた。さらに山中での徹底抗戦を期するために手首をかみそりで切り、血判状をつくつた。リーダーが、私たちの決意を先生の所へ報告に行つたが、逆にその拳を戒められてしまった。抗戦派は、血判状だけを残し、むなしく解散してしまつた。

当時二十二歳 学童疎開先寮母

「寂しがりません、勝つまでは。欲しがりません、勝つまでは」の言葉通り、わがままを言わなかつた女子疎開児童たちが、先生の膝にすり寄つて泣いていたことを覚えています。

(文責 編集部)



夏休みと教師



現代っ子の消費生活

— 商店探訪記 —

現代っ子はガメついと言う。社会やおとなたちがそうさせたのだ。いや、合理的な生活態度が育ちつつある証だなどと、世のおとなどもは論議する。いま、子どもたちは、「夏休み」を満喫している最中。子どもたちの消費生活を、売り手の側からながめてみたらどうだろうか。以下は、編集部による市内の、店屋さん探訪記録である。

どがセット物。親のついでに買っている場合は、安全な花火を求める。健全な買い方といえよう。

おもちゃに対する子どもの好みは、高価な物に向けられる。千円、二千円以上の物である。高価な物を買われる場合はクリスマス・正月・誕生日などのプレゼントとしてである。

ところで、好みには個人差があり、一律に断定できるものではない。たとえば、小学校高学年で、キュービーのほしい女の子もいるというように。

一時流行したシール・バンダは、最近すたれつつある。むしろ、オーソドックスな物に興味が移っているようだ。おもちゃの世界では、線香花火的な流行は、必ず衰える鉄則があるということだ。

夏休みだからといって特別変わったわけではない。水泳や、ソフトボールなどに興じているためか、買いに来ることは少ない。例年、八月中旬ごろになると、退屈するのか、ゲームを買いに来るといふことである。

プラモデルは、小学生に人気があるようだ。戦車のキャタピラには、特に魅力があるらしい。機関車は、中高校生向きである。

花火は、みやげ用に買われる。ほとん

■十円で買えるもの

— 路地の菓子屋で —

小学校一・二年生くらいの男の子、四五歳の妹を連れて来る。

「おばさん、くじちょうだい。」

二人とも十円ずつ持っている。

「なんだ、カスカ。」

ガムをほおばりながら帰って行った。

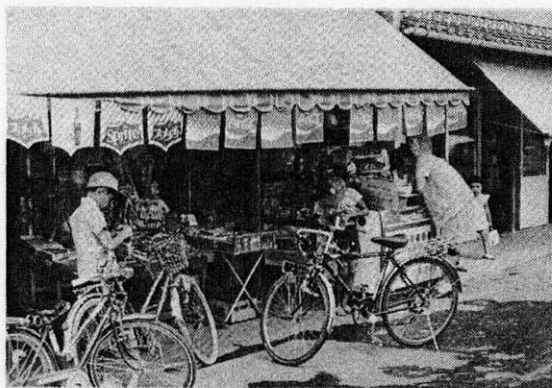
「ちよつとも目が離せないですよ。この間も、知らんどの間に景品の大きいものを持っていかれちゃってね。当たってないのに、『当たった、当たった』と、言うんだから。今の子は、ちゃっかりしていますよ。」

おばさんが話してくれた。

ほとんどが十円玉を持って買いに来る。二年ほど前までは、五円玉を持って来たのだが……。

・十円で買える物
えのついたアメ。ベッシャン。くじ。ラムネ菓子は五円。
百円以上になると親がついて来る。大きくなるにしたがって、二十円、三十円と金額が増す。

週刊誌が置いてある。もちろん、ピンク雑誌。学校帰りの中学生が、はずかしそうにお金を置いて、さつとカバンにねじこんで帰って行くこともあるという。
「カンシヤク玉」が店の隅にある。側の柱に「ゴム管」がぶら下がっている。
「カンシヤク玉」を飛ばすための物であろうか。キャラメル箱のかすかに、ほこりの見えるのが妙にわびしく時の流れを感じた。





■テレビッ子はテレビから

― 郊外の文房具店で ―

最近では品物の種類が多い。その中からテレビで宣伝された物を選び出す。子どもから、そういう品物を要求され、急いで仕入れることにもなる。

たとえば筆入れ箱の場合はおもしろい。一時、チャックやマジック、ダイヤル式などの新しい物が飛ぶように売れた。それが、新聞などで批判されたためか、最近では再び、箱型のものが売れている。意外な現象といつてよからう。

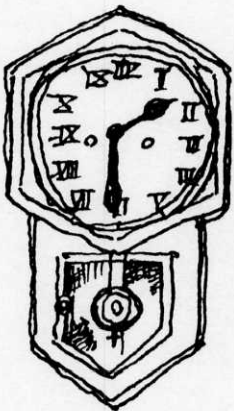
ひとりが持てば、たちまち流行し、高級品ほどよく売れるようだ。特に、中学生の買いつぶりのよさが目立つという。低学年の子どもの買ひ方は、親について来てもらう場合が多い。自分のほしい

物を買いたいときほどそうだ。子どもに甘い親の一面がうかがえる。成績のよい中学生で、親に、ノート・えんぴつ・けしゴムなどを買わせるものが、最近特に多くなりつつある。親は、喜んで引き受けている様子であるとか。どう解釈したらよいのだろうか。

卒業までは、大切に取扱いということは過去の話。ほしくなればこわして新しい物と取り替える。すでに、二個も筆箱を買った小学校一年生の子ども。いつも新しい物を持っていたのが現代っ子であるといえようか。

意思表示が明確で、ことば使いのはきはさしていることが最近の子どもの特徴でもある。一昔前までは、何を買いたいかのわからないし、あいさつもできなかつた。何かが育ちつつあると感じさせられる。

欠乏を知らない子どもたち、過保護に育った現代っ子、瞬間反応にたけた小学生、自己本位の思考力にたよるテレビッ子どもは、消費の面にも大いにその本領を発揮している。喜ぶべきか悲しむべきかわからない。
(文責 編集部)

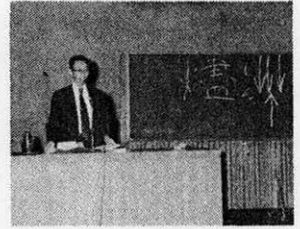


ええ、家は、昔は貸本屋をやっていたんです。そうですねえ、十二・三年前まででしょうか。昭和三五・六年ごろから、貸本が下火になり、いまは、まるつきりだめなんです。でも、マンガだけは貸本をしています。二十円で貸しているんですが。いえ、テレビの影響ではないんです。週刊紙に食われてしまったんです。もつとも、テレビが家庭にはいって来たときは、多少減りはしたものの、すぐに、元にもどりましたよ。ところが、週刊紙が爆発的に売れるようになってからというものは、全然もどきません……。しかたがないので、古本屋を始めたわけなんです。まあ、ごらんの通りです。貸本屋めあてのマンガが、昔、発行されていたんですけど、今はありません。え、マンガを借りに来る人ですか。それは、

■マンガはもう借れない

― ある貸本屋の話 ―

もつとも、休みの日か、土曜日で、それも、ほんの僅かなんです。子どもたちは勉強に追いまわられているのか、それとも、テレビを見ているのでしょうか。このごろの子は、家の外に出ることが少なくなりましたねえ。



一 講演要旨 一

明日をつくる

子どもたちのために

東井義雄

先生方の前には、次の日本を創つていく子どもがいる。その子どもとの出会いをどんなふうにしてくださるか。結局、先生方の生きがいは、そこにあるのではないでしようか。このしあわせがわからなくては、教員の待遇、そんなものは、けちなものだと思いますね。

八鹿小学校に、マサキちゃんという子どもがいました。末恐ろしいやんちゃ者という評判でしたが、三年生になって井上という先生が担任してくれました。井上さんは、人間にくずはないということを本気になって信じている教師です。最初の日、やんちゃ者のやんちゃぶりを見ながら、(わしの子どもの時分に、ように似ているなあ)と思つたそうです。手に負えない子どもとしてではなく、なつかしいものとして見てやつてくれた。それがその日のうちに、ちゃあんと通じているんです。

「あしたから勉強する教室、きれいにして帰ろうや」と言うと、今までいちどもそうじしたことなかつたマサキちゃんが、「先生、そんな雑布貸してえ。」

と言っています。井上さん、うれしくてなんでもんですから、おかあさんに手紙を書きました。マサキちゃん、見どころありますよ。雑布貸してくれなんて言うてるんですよ。きつといい子になりたがってるんですよ。

おかあさん、感激してしまいました。大急ぎで雑布縫つてやつたそうですが、あくる日、「先生、もう雑布借りんでもええて。おかあちゃんが縫つてくれたあ。」開いたマサキちゃん自身がびっくりしてしまいました。雑布には、なんと「ガンバレ、シッカリシッカリ」と刺しゅうがしてあるんです。「おまえ、すばらしい雑布持つてるじゃないか。こんなすばらしい雑布、何万円出しても買えやせんぞ。日本一の雑布、日本一のかあちゃんや。ええ子にならにや、あかんわい。」

雑布を持ったマサキちゃんを写真にとつたんですが、その写真ができたところ、自分の席について勉強しはじめた。おそうじがんばるようになりまして。五月にはいって、子どもの日に運動会

がありました。走るのが遅いマサキちゃんは、頭が痛いとか足が痛いとか言っていたべんも走つたことがなかつたのです。ドン。走つたのです。びりから二番でした。「こんだけ、おまえ、やるじゃないか。きょうの一番よりおまえの方が値うちがあるぞう」と、井上さんは、肩をたたいて励ましてやつたというんです。運動場の隅でこの様子を見ていたおかあさんは、(なんとというすばらしい先生に巡り合うことができたんだ)と思わず、感激して泣いてしまったということです。

マサキちゃんは、いよいよがんばり屋になりました。ある晩、高い熱を出して一睡もしないことがありました。朝になり、「きょうは、学校休め。こんな熱では、先生にも迷惑かけるから」と、おかあさんが言うと、「先生の顔見んと寝ておれるか。」そのまま学校へと飛び出して行きました。熱っぽい異様な顔に気がついて井上さんが熱を計つてみると、三十八度何分もある。びっくりして送り帰したそうですが、「先生の顔見て来たわい。もう寝たるわい。」と言って寝たそうです。

やんちゃ者しか持たない、やんちゃ者の光をぞんぶんに出して、この三月卒業していききました。人間にくずはないんですね。どうぞ先生方、ひとりひとりの子どもに、どんなにつまらなく見えるやつにも、生まれてきてよかつたというように「生まれがいい」を育てるために、子どもとの出会いを大切にしてください。

(文責 東海中・千田水城)

私の選書

— 新刊書より —

ちかごろのトピックは、なんといつても日中復交であろう。しかし、これを扱うマスコミの、あいもかわらぬ大同小異の論調には、うんざりする。いわば、一種の報道管制といえないこともない。読書によって補うほかあるまい。

- 上田正昭他 歴史と人間 朝日新聞
- 上田薫 個を育てる力 明治図書
- O・ラチモア 中国の世界 毎日新聞
- むのたけじ 解放への十字路 評論社
- 福田恒存 言論の自由といふ事 新潮社
- 深沢七郎 生き難い世に生きる 新潮社
- 陸井三郎 ベトナム帰還兵の証言 岩波新書
- 外山滋比古 省略の文学 れんが書房
- 安岡章太郎 自叙伝旅行 文芸春秋
- 加藤秀俊 続暮しの思想 中央公論
- 横山理子 多摩川の自然を守る 三省堂新書
- 犬養道子 ラインの河辺 中央公論
- 井上 靖 幼き日のこと 毎日新聞
- 堀田善衛 スフィングス 毎日新聞
- 李 恢成 約束の土地 講談社
- (葵中・長浜宏雄 葵中)
- (鈴木和夫・梅園小・畑中貫一)



読書会次々に誕生

青年、女教師中心のグループも

夏休み。連日、各種研修会、実技講習、体育諸行事が続く一方、自由な集まりによる読書会も次々に生まれ、それぞれユニークな活動で会員もふえている。

●岡崎読書会

森信三先生をお迎えして毎月一回、働く婦人会館で開催。汲めども尽きない意味の中に、人間教師のあり方を教えられ感銘が深い。現在のテキスト、山県三千雄著「人間」。例会ごとにすぐれた教育関係の著書の紹介等もある。会費三百円。(世話係、鈴木依治先生(東海中)・長浜宏雄先生(葵中))

●女教師読書会

働く婦人会館で毎月第一、第三水曜日・講師は糟谷正孝先生ほか女教師ばかりの気さくな、たのしい読書会。雑談の中に交流もできて例会が待ち遠しい。

【刊行あない】

○「保健活動のあゆみ」

連尺小学校編

同校は四十七年度健康優良学校第一。この機会に、これまでの健康教育の歩みを含めて、各分野にわたる実践、研究をまとめたもの。B5判、七〇ページ

○郷土誌「ほそかわ」

細川小学校編

学制百周年記念事業の一つにと、学区の方々と先生方の協力による労作。写真、図表も多く平易にまとめて読みやすい。変貌の激しい学区だけに貴重な資料。A5判、一二〇ページ

子先生

(申込先、婦人会館・浅井千代)

●さわらびの会

若い国語教師中心だが誰でも。

三教研究統計教育研究会発足

教育の現代化への要請から、科学的な態度、情報処理能力を育成する統計教育の重要性が叫ばれている。

本年度から三教研にも統計教育研究特別委員会(部長に福岡小塚本校長)が新設され、三河

全域の小中学校が加入することになったが、その発足第一回の研究会が七月三日午後福岡小で開催された。

若い国語教師中心だが誰でも。連絡、紹介を願います。

約一二〇名の会員が参加し、授業研究、分科会での研究協議を通して統計教育への理解を深め、発足にふさわしい有意義な会であった。

本年度研究委託生

応募者の中から次の七名の方。研究期間は来年一月末まで。
・根石/上田光・福岡/籠橋澄夫・広幡/柴田和一・本宿/伊藤安彦・城北/長坂博幸・甲山山本利春・東海/蓮尾均

48・5・1学校基本調査より

●岡崎の児童・生徒数、教職員数等の実態

区	分	学校数	学級数 ()内特殊	児童・生徒数			校長・教員数 ・常勤講師を含む			養護職員		事務職員	
				計	男	女	計	男	女	教諭	婦	県	市
小	学	校	554 (20)	19,643	9,993	9,650	670	396	274	24	10	30	23
中	学	校	228 (10)	9,021	4,575	4,446	373	308	65	9	5	14	11
(合	計)	48	782 (30)	28,664	14,568	14,096	1,043	704	339	33	15	44	34

○学年別児童・生徒数

小 学 校				中 学 校			
学年	男	女	計	学年	男	女	計
1年	1556	1580	3136	4年	1650	1562	3212
2年	1781	1676	3457	5年	1660	1578	3238
3年	1765	1724	3489	6年	1581	1533	3111

○学級・学校の規模

	小学校	中学校
1校当たり児童生徒数	578人	646人
1校当たり学級数	16学級	16学級
1学級当たり児童生徒数	35.4人	39.5人

8月の行事

日	曜	行	事
1	水	市家庭科実技講習(2日まで)	大岡越前守展(31日まで岡崎城) 月報岡崎の教育編集委員会(市役所)
2	木	市音楽実技講習(竜海中)	OHP講習会(婦人会館)
3	金	県小学校教育課程研究集会(連尺小)	市長杯中学校陸上競技 (葵中) 市英語科実技講習(4日まで竜海中)
4	土	夏季学校図書館実務講習会	(岡信本町支店)
5	日	視聴覚幹部講習会(本宮山ロッジ)	理科県外研修(隠岐)
6	月	県新任教員研修会分科会(梅岡小)	学校事務の手引改訂委員会(市役所)
7	火	県新任教員研修会(勤労会館)	県P中央研修会(城北中) フィルム選定会(婦人会館) 認読(10日まで)
8	水	小学校水泳大会	(羽根小)
9	木	市小社会科実技(連尺小)	県中学教育課程(豊橋中部中) 市音楽実技(竜海中) 市芸術祭打合(市役所)
10	金	市小社会科実技講習(市内巡検)	県中学校教育課程研究集会 (春日井勝川小) 養護実技講習(市役所)
11	土	市特殊教育実技講習(婦人会館)	西三河選手権水泳大会 (葵中) 市美術館開館1周年記念浮世絵名品展(美術館)
12	日	岡崎市民総合水泳大会(市民プール)	学童水泳記録会(市民プール)
13	月	市技術家庭科実技講習(14日まで福岡中)	
14	火		
15	水	月報岡崎の教育編集委員会(市役所)	
16	木	市長杯中学校水泳大会(葵中)	三教研講演会/森昭氏 (甲山会館) 県管理職研修会(全体集会)
17	金	県管理職研修会(職場別研修会18日まで)	文化財保護審議会 (市役所) 中学校生徒会模擬議会(市役所)
18	土	教頭会講演会(婦人会館)	
19	日	岡崎市民軟式庭球選手権大会(公園コート)	岡崎市民夏季ソフトボール選手権大会(県営グラウンド)
20	月	中学理科教育講座(県科学センター)	県中学校美術実技 (愛教大) 東海特殊研究大会(21日まで伊良湖)
21	火	中学校音楽講座/日本の音楽(竜海中)	
22	水	体育的クラブ活動指導者講習会(公園、城北中)	東海地区学校図書館研究大会(23日まで豊田市)
23	木		
24	金	学校事務の手引改訂委員会(市役所)	
25	土	ボーイスカウト指導者講習会(26日まで山の家)	
26	日	市民カヌー大会(巴川)	東西三河対抗水泳大会(豊橋市) 岡崎市子ども会ソフトボール大会(公園グラウンド)
27	月		
28	火	三河学び方研究会総合研究大会(刈谷市)	
29	水		
30	木	「岡崎の歴史物語」編集委員会(市役所)	
31	金	指導係研修会(蒲郡)	



六階の窓

○渇水 渇湯・乾涸どのごとくばも喉がひりひりするような響きをもっている。七月の降雨量四ミリでは、町中乾いて白っぽい眺めになってしまった。

一般二〇パーセントから三〇パーセントと厳しい節水に、子どもたちの大きな協力があつて、川で川であり、川を守ること

私たち自身を守ることである。○生命 水も生き物であり、川も生き物であることを痛感した。山の学校へ行った子たちが水が漏れたために、コップ一杯の水で歯磨きから洗面までするという経験をした。あり余る生活になれた私たちにとつて、物の尊さを知るまたとない機会である。

暑いさかりに水泳を我慢した子どもたち、それを指導された先生方に敬意を表したい。

●：夏休みにはいって。研修のとき。たっぷり養分をかかえて、二学期に向かうために忙しい。この号が、お手もとにとどくころは、ためこみのさいちゅうであらう。

●：教師と子どもが、どんな休みをすごしているか、特集的に現代の子どもの周辺をさぐつてみた。

●：八月といえはもう一つ、二十八年前のあの日が思い出され、語られる。岡崎の学校の当時を「いまはむかし」に綴った。尋ね調べると、興味はますますかきである。

●：七月十七日岡崎医師会館で県教育長仲谷先生のご講演をうかがった。巻頭のことばはその中の一部分をいただいたもの。教育随想には、市教育委員松野尾潮音先生の玉稿をいただいた。読み味わつていただきたい。

●：カットは、甲山中学校の鳥居耕平先生にお願いした。